みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

観光を中心とする経済発展と文化：雲南省大理盆地の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 廣子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001726

観光を中心とする経済発展と文化
雲南省大理盆地の場合

横山　廣子

はじめに

雲南省は中国の西南端に位置し，4000キロ余りの国境線で東南アジアの3ケ国と接する所謂「辺境」の省である。山地が総面積の9割以上を占め，山間に「バーツ」と呼ばれる比較的人口密度の高い平地が点在している。これらの地理的条件は，漢族を含めて26の，省レベルで全国最多の種類の民族が代々居住する民族状況の形成と不可分に結びついている。雲南は少数民族人口が総人口の三分の一に上る典型的な少数民族居住地域である。

歴代の中国の政治的中心地や経済的文化的先進地から遠く隔たった内陸の雲南は，従来，全国的に見て，経済的に立ち遅れた地域であった。

1984年の雲南省の農業総生産を農業人口一人当たりに換算した数値は270元で，全国平均の343元を20%以上も下回った。これを全国の省レベルの行政単位間で比較すると，低い方から数えて第3位である。穀物生産量，軽工業生産などでも一人当たりに換算したその国内での順位は同様であった（中共雲南省委政策研究室編 1986: 106）。このような全国的位置づけは80年代を通じて大きく変化することはなかったし，その後も経済的後進地域という雲南省のイメージはそのまま維持されてきたと言ってよい。95年の一人当たりの国内総生産（GDP）は全国第26位で，一人当たりの穀物生産量が上昇し，第16位に躍進したとはいえ（『新編雲南省情』編委会編 1986: 1036-1037），市場経済化や商品経済化が進展する中では依然として経済的に苦しく，貧しい省の一つにはちがいない。

しかし，雲南の経済自体の推移に焦点を合わせてみると，それは90年代以降，タバコ産業や観光の発展，東南アジア諸国との国境貿易などにより，雲南経済は着実な発展を遂げてきている。省全体のGDPは，94年から95年にかけて10パーセントの伸びを示し（中国研究所編 1999: 428），95年には1206億6800万元となっている。1952年の国民総生産と57年以降のその数値の毎年の推移を示した表1を見れば，87，88年頃を境に大きく成長を遂げてきていることは明らかである（雲南省統計局編 1996: 27-28）。

この80年代後半からの経済発展により，中国を全体として見た状況と同様に，雲南省内でも地域間格差が拡大している。省内の大勢を鳥瞰的にとらえた特徴では，漢族が多く居住する地域に比べて，少数民族地域の経済は遅れていると一般に言われる。しかし近年の変化によって，経済的条件に恵まれた少数民族地域では，かなり急激な発展も見られる。そしてそれが文化にかかわる種々の変化と絡み合う状況が観察される。本文で

は，その典型の一つと思われる雲南省西部の大理盆地に居住するペー（白）族の事例を取り上げる。観光を中心とする経済発展の中で，彼らの民族文化にどのような変化が生じているのか，その実態を地方政府などを中心とする上部の動きと現地農村での状況の両面から具体的に把握することを通して考察する[1]。

表1　雲南省の国民総生産（GNP）の推移

年	国民総生産（億元）	前年からの増加率（%）
1952	11.78	—
1957	22.53	—
1958	23.21	3.0
1959	25.35	9.2
1960	25.43	0.3
1961	22.90	-9.9
1962	24.50	7.0
1963	25.63	4.6
1964	29.25	14.1
1965	33.62	14.9
1966	36.39	8.2
1967	34.18	-6.1
1968	26.51	-22.4
1969	34.31	29.4
1970	38.52	12.3
1971	43.47	12.9
1972	49.50	13.9
1973	54.57	10.2
1974	51.78	-5.1
1975	54.29	4.8
1976	49.27	-9.2
1977	55.84	13.3
1978	69.05	23.7
1979	76.83	11.3
1980	84.27	9.7
1981	94.13	11.7
1982	110.12	17.0
1983	120.07	9.0
1984	139.58	16.2
1985	164.96	18.2
1986	182.28	10.5
1987	229.03	25.6
1988	301.09	31.5
1989	363.05	20.6
1990	451.07	24.2
1991	517.41	14.7
1992	618.69	19.6
1993	779.21	25.9
1994	973.97	25.0
1995	1,206.68	23.9

出典：『雲南統計年鑑』

経済発展と観光

大理盆地は雲南省の西部のやや北寄りに位置し，西側を南北に19の連峰からなる蒼山が遮り，東側は耳の形をしているので「洱海」と呼ばれる湖が，やはり南北に横たわっている。そこで盆地は南北の距離約40キロ余りの細長い形状をしている。緯度で見れば沖縄よりも南になるが，標高約2,000メートルの高原にあるため，夏でも平均気温が20℃余りで，冬でも零下になることはほとんどない温暖な気候である。12月でも天気の良い日は最高気温が20℃を超えることもあるが，朝晩はかなり冷え込み，1年の温度差は少ないが，1日の温度差が大きいという特徴がある。水と山があり，気候にも恵まれ，観光にはもってこいの条件を備えていると言ってよい。

大理盆地が政治的地理的中心を占める大理白族自治州では，改革開放の具体的取り組みが1982年頃から始まった。大理盆地の農村における生産責任制の導入は，82年末に各世帯が生産を請け負う土地の分配・調整がおこなわれ，83年春から始まる夏作の穀物生産から世帯単位で耕作をおこなうようになった。夏作には米あるいはトウモロコシを栽培し，冬作では小麦やソラマメを植えるという農業は，大理盆地に暮らす農民にとって伝統的に重要な生業である。従来の集団による生産と比べると，収穫を増やすほど，それが直接的に世帯の利益となるため，この生産体制の転換と，農業面への科学技術の導入によって穀物の生産量はその後，飛躍的に増大していった。それにより，生活基盤が安定し，さらなる利益を求めるゆとりが生まれた。

そもそも大理盆地は人口密度が高く，すでに清代から耕地不足の状況が顕著であった。農業だけでは生活は苦しく，それを補う種々の副業が発達している土地柄でもあった。男たちの中にはよその土地に行って小商いをする者や，馬や騾馬を連ねて遠隔交易に従事する「馬幇」と呼ばれる者も少なくなかった。このような商業活動は戦争や社会主義集団生産体制の確立によって途絶えたが，文化大革命期の70年代に生産隊などによる「社隊企業」が奨励されると，伝統的農業生産以外の種々の経済活動に活路を見出す動きが見られた。80年代に改革・開放政策が進展し，世帯単位の経済活動の自由が大きく認められるようになったことにより，それらの「副業」と呼ばれる経済活動はいよいよ活発になり，それがもたらす収入は，農業に比べて大きく増大していった。

表2 農民一人当たり「純収入」の比較（単位：元）

年	全国	雲南省	周城村
1980	191.3	150	121
1981	223.4	178	110
1982	270.1	232	126
1983	309.8	267	194
1984	355.3	310	430
1985	397.6	338	723
1986	423.8	338	673
1987	462.55	365	795
1988	544.94	428	855

年	全国	雲南省	周城村
1989	601.51	478	1,378
1990	686.31	541	1,155
1991	708.55	573	1,255
1992	783.99	618	1,306
1993	921.62	675	1,384
1994	1,220.98	803	1,532
1995	1,577.74	1,011	1,810
1996	1,926.07	1,229	2,480
1997	2,090.13	1,376	2,880

出典：全国の数値は『中国統計年鑑』，雲南省の数値は『雲南統計年鑑』，周城村の数値は現地での聞きとり調査による。

たとえば私が1984年の春以来，調査を続けている大理市内にあるペー族の農村，蒼村（仮名）では，村の経済収入の総計に占める農業生産の収入の割合を見ると，83年には23.3%であったのが，87年には14.5%となり，さらに95年になると11.3%，96年に9.1%と減少の一途をたどっている。逆に農業生産以外の「副業」は，80年代初期以来，その比重を増大させ，それによって全体的な経済発展がもたらされた。農民の経済状態を示す指標としてよく使われる一人当たりの「純収入」では，蒼村の農民は83年までは全国の

農民や雲南省の農民の平均に及ばないが，84 年を境にそのいずれをもはるかに上回るペースで豊かになってきていることが表 2 に明らかである（国家統計局編 1987：697-698; 同 1989: 742-743; 同 1994: 278; 同 1998: 346; 雲南省統計局編 1996: 278; 同 1998: 280)。

蒼村の事例に顕著に見られるように，近年の大理盆地の農村は著しい経済発展を遂げてきた。その中にあって，特に 84 年以降の観光業の発展が経済全体に対して少なからぬ影響を及ぼしていると指摘できる。

大理白族自治州では，その自然的，歴史的，民族的条件を意識して，改革解放の初期から，観光業の発展を重視してきた。とりわけ自治州の中心地である大理盆地地域は 82 年 3 月には全国 24 ケ所の第一期「歴史文化名城」の一つとして国務院に批准され，また同年 12 月には大理州が全国 44 ケ所の「風景名勝区」の一つとして，やはり国務院の批准を受けている。これは大理盆地とそれを中心とする大理州地域が国家レベルの観光地として認められたことを意味する。

84 年当時，国家レベルの観光地にとっての重要な課題の一つは，海外からの旅行客を受け入れて外貨を獲得することであった。それを実現するための一連の政策上の措置が実施されていった。84 年 2 月に国務院は大理市を乙類地区として対外開放することを批准し，同年 4 月から外国人も特別の許可なく大理市を訪問することができるようになった。さらに 85 年 3 月に従来の大理白族自治州外事辦公室を基礎として州外事旅游局が組織され，大理市ならびにそれに続いて限定的ながら対外開放された同自治州内の賓川県，剣川県，巍山県，屏源県の観光を専門的に管理する政府機関が誕生した（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1990: 207)。同年に雲南省が定めた大理白族自治州における観光開発計画の大綱には，蒼山屏海地区，石宝地区，鶏足山地区，巍宝山地区，茈碧療湖療養地区の 5 つの「風景区」が主要観光地点に選ばれている（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1991: 238-239)。この大綱に沿って対外開放も実施されていったのである。5 つの「風景区」を合せて約 1,000 平方キロ余りの広大な地域の観光開発がその後，進められていった。

海外旅行客を視野に入れた観光を振興する体制が整備されたのとほぼ同時期に，各行政レベルの政府機関が観光名所などの整備と保護にまず着手し，89 年までに政府と民間から 3,000 万元が投入されて，観光スポットとなる寺廟，交通機関，サービス関連施設の修復と建設が進められた。その結果，89 年までに州内に 1 万人余りの観光客を収容できるホテルなど一定レベルの条件を満たす宿泊施設が整った。外国人観光客の受け入れも可能なホテルは 11 ヶ所で，その総ベッド数は 2,682 台，そのうちバス・トイレ付きの部屋のベッド数が約 20%を占めるまでになった（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1990: 207)。

91 年から始まった国家の第 8 次 5 ケ年計画の中で，大理州では第三次産業の成長を大きな目標に掲げた。7 次 5 ケ年計画終了時の 90 年の産業構造は，全体を 100 とした場合

の第一次産業，第二次産業，第三次産業のそれぞれの比率が46：27：27であった。それが95年末には，38：31：31へと変化している。つまり，第一次産業の割合が低下し，第二次および第三次産業の割合が成長した。この変化の中で，観光は第三次産業の拡大の旗頭としてほぼ期待通りの役割を果たしたと言われる。

表3　大理白族自治州を訪れた海外旅客数の推移（単位：のべ人次）

年	海外旅客総数	総数中の外国人客	総数中の香港・マカオ・台湾からの客	総数中の華僑客
1982	124	—	—	—
1983	110	—	—	—
1984	5,031	3,439	1,592	—
1985	8,837	6,401	2,436	—
1986	12,335	9,271	3,064	—
1987	16,797	12,997	3,800	—
1988	19,262	15,627	3,635	—
1989	13,036	11,034	2,002	—
1990	10,215	5,776	4,439	—
1991	22,046	13,536	＊8,464	46
1992	27,095	15,684	11,382	29
1993	30,710	21,834	8,868	8
1994	34,579	28,112	6,406	61
1995	40,612	31,856	8,491	265
1996	45,319	39,145	6,105	69
1997	57,747	43,786	12,976	985

出典：『大理州年鑑』（1990～1998年）

＊1990年までの総数の内訳は「外国人」と「港澳台同胞」に分類されていたが，91年以降は「港澳台同胞」という統計数値ではなく，内訳の数値は国あるいは地区別に細分化されている。そこで，91年以降は「港澳同胞」と「台湾同胞」を合計した数値を「港澳台同胞」の欄に示した。また91年以降は「外国人」にも「港澳台同胞」にも含まれない「華僑」の旅客がおり，その数値が特に明示されていない年についても，海外旅客総数から「外国人」ならびに「港澳台同胞」の数を引いた数値を当該欄に示している。

83年まで年間わずか100人余りであった大理白族自治州を訪れる海外からの旅客数は，大理市が対外開放された84年に5,000人を超え，95年には4万人を上回るようになった。特に91年以降の伸びがめざましいが，この間，大幅に増加したのは，まずは香港やマカオ，台湾からの旅客であった（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1990: 208; 1991: 240; 1992: 251; 1993: 156-157; 1994: 140-141; 1995: 145; 1996: 126-127; 1997: 148; 1998: 150-151）。表3は82年以降の大理州への海外からの旅客数の推移を示したものである。

大理市とその周辺の県が徐々に外国人旅行客に開放されていった80年代は，海外からの旅行客といえば，日本，アメリカ，ヨーロッパからの旅行客が大半を占めていた。ところが89年6月起こった天安門事件を契機に，同年後半から90年にかけてそれらの旅行客が激減する中，中国では「港澳同胞」とか「台湾同胞」と呼ばれる香港，マカオ，台湾

からの旅行客が，事態が収拾した後，まもなく以前にも増して多く大理を訪問するようになった。これは香港や台湾など「アジアの小竜」と呼ばれる目覚しい経済発展を遂げた地域において，海外旅行に向けて消費する余裕がすでに生じていたこと，そして特に90年の窮地を救うために進められた中国系住民のネットワークを通じた旅行誘致キャンペーンなどが複合的に作用した結果である。

したがって，90年を境に生じたこの傾向は大理白族自治州に限定されるものではなく，雲南省全体についても見られるものである。雲南省旅游局がまとめた海外旅客に関する統計数値の推移からそれは明らかである（表4参照）。

表4　雲南省を訪れた海外旅客数の推移（単位：のべ人次）

年	海外旅客総数	総数中の外国人客	総数中の香港・マカオ・台湾からの客	総数中の華僑客
1978	1,299	759	540	—
1979	13,444	7,901	5,543	—
1980	20,500	7,900	12,600	—
1981	23,600	9,100	14,500	—
1982	40,468	24,333	16,135	—
1983	41,513	26,606	14,907	—
1984	65,124	43,319	17,321	4,484
1985	80,101	57,248	15,913	6,940
1986	105,432	66,918	27,010	11,504
1987	113,609	74,795	28,764	10,050
1988	121,312	76,658	＊42,168	2,486
1989	74,431	40,127	32,193	2,111
1990	148,166	49,787	97,458	921
1991	210,538	87,921	119,780	2,837
1992	313,462	160,059	150,771	2,632
1993	405,209	268,573	132,837	3,799
1994	522,059	402,332	117,795	1,932
1995	596,942	473,769	122,398	775

出典：雲南省旅游局提供資料

＊本統計では1988年から「台湾同胞」の訪問が始まっており，同年以降のその数値は，7,389人，10,640人，50,076人，67,584人，90,949人，84,377人，56,674人，61,650人というように推移している。1990年には50,076人と前年の4.7倍に急増している。

この90年から始まった香港，マカオ，台湾からの旅行客の増加に続いて，大理白族自治州を海外から訪れる旅行客に関して生じた新しい変化は，92, 93年頃からのシンガポール，タイ，マレーシアからの旅行客の急増である（表5参照）。これも雲南省全体への海外旅行客の動向と軌を一にするものである（表6参照）。その要因としては，東南アジアから近いという雲南の地理的条件と，その時点までに香港や台湾に続いてそれらの東南アジア諸国において経済発展が一定の成功をおさめ，海外旅行をする経済的条件が整っていたことが挙げられよう。

表5　大理白族自治州への国・地域別海外旅客数の推移（客数の単位：のべ人次）

年	1991		1992		1993		1994	
国・地域	順位	客数	順位	客数	順位	客数	順位	客数
香港マカオ同胞	1	5,622	1	8,037	2	5,846	2	4,132
台湾同胞	2	2,842	2	3,345	3	3,022	6	2,274
日本	3	2,432	3	2,339	4	2,349	4	3,584
アメリカ合衆国	4	1,752	4	1,683	6	1,695	5	2,837
イギリス	5	1,578	—	—	8	1,459	7	1,824
フランス	6	1,095	6	1,275	9	1,339	8	1,817
オランダ	7	1,066	7	1,241	7	1,518	9	1,544
ドイツ	8	1,027	8	1,075	10	1,119	10	1,494
シンガポール	—	—	5	1,472	1	6,388	1	4,435
オーストラリア	—	—	9	493	13	493	13	973
イタリア	—	—	10	454	14	474	14	669
マレーシア	—	—	—	—	11	770	11	1,369
タイ	—	—	—	—	12	565	12	1,093
カナダ	—	—	—	—	15	420	15	644
スイス	—	—	—	—	16	294	16	497
スウェーデン	—	—	—	—	17	192	19	309
ベルギー	—	—	—	—	17	192	—	—
ニュージーランド	—	—	—	—	19	191	17	394
スペイン	—	—	—	—	20	119	21	129
その他のアジア	—	—	★	615	21	94	18	314
インドネシア	—	—	—	—	22	30	24	58
韓国	—	—	—	—	23	25	20	144
フィリピン	—	—	—	—	24	17	28	5
その他のオセアニア	—	—	★	390	25	17	26	8
その他のヨーロッパ	—	—	★	2,652	26	16	—	—
ロシア（ソ連）	—	—	—	—	27	13	25	17
華僑	★	46	★	29	28	8	23	61
その他のアメリカ	—	—	★	398	29	4	22	84
アフリカ	—	—	—	—	—	—	27	6
その他	★	4,577	★	1,597	5	2,035	3	3,864
海外旅客総数		22,046		27,095		30,710		34,579

表5　つづき

年	1995		1996		1997	
国・地域	順位	客数	順位	客数	順位	客数
香港マカオ同胞	2	5,331	6	2,812	2	7,087
台湾同胞	4	3,160	4	3,293	4	5,889
日本	3	4,250	1	5,551	1	8,574
アメリカ合衆国	6	2,459	5	2,927	5	3,135
イギリス	10	1,756	9	2,000	8	2,512
フランス	12	1,706	10	1,894	9	2,240
オランダ	8	2,068	8	2,411	7	2,696
ドイツ	11	1,724	11	1,879	13	1,519
シンガポール	1	6,056	3	4,512	3	6,955
オーストラリア	14	746	17	905	14	1,036
イタリア	15	551	14	1,143	20	546
マレーシア	7	2,272	7	2,739	6	2,884
タイ	5	3,058	2	5,197	10	2,025
カナダ	13	921	16	982	18	855
スイス	17	459	19	576	22	434
スウェーデン	22	113	23	305	23	367
ニュージーランド	21	212	22	403	24	358
スペイン	25	160	25	109	28	77
その他のアジア	16	544	13	1,210	12	1,596
インドネシア	28	24	28	33	29	31
韓国	19	336	18	620	11	1,792
フィリピン	24	101	26	74	25	88
その他のオセアニア	23	105	20	500	21	451
その他のヨーロッパ	18	359	15	1,003	15	1,002
ロシア	27	32	29	30	28	61
華僑	20	265	27	69	16	985
その他のアメリカ	26	90	21	440	19	618
インド	30	8	30	7	26	78
アフリカ	29	21	24	304	—	—
モンゴル	—	—	31	2	—	—
その他	9	1,785	12	1,399	17	951
海外旅客総数		40,612		45,319		57,747

出典：『大理白族自治州年鑑』（1992～1998年）
★印は順位外の扱いとした。

雲南省側でもそれらの東南アジア地域を意識した積極的な観光政策が進められた。たとえば，比較的早くから航空路線が開設されたバンコクに加えて，シンガポール，クアラルンプールなどと雲南の省都の昆明との間を直接往復する航空路線が94年前後に開設され，「東南アジアから最も近い雪山観光」などの宣伝活動もおこなわれた。また大理白族自治州について言えば，92年頃から海外旅行客の中でも特に東南アジアからの客を主要なターゲットとする傾向が顕著になってきた（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1993: 157 ）。そして95年に大理飛行場が開設されて昆明との間を30分の飛行時間で往復できるようになり，東南アジア諸国から短時間で雲南省西部を回るツアーはますます便利になったのである。

表6　1993～95年の雲南省への海外旅客の主要出身地

国家および地区	1993年		1994年		1995年	
	人数(人)	比率(%)	人数(人)	比率（%）	人数(人)	比率(%)
香港・マカオ・台湾・華僑	136,636	34	119,727	23	123,173	21
タイ	59,296	15	89,374	17	109,636	18
シンガポール	51,627	13	67,161	13	57,453	10
日本	26,094	6	34,776	7	35,691	6
アメリカ合衆国	14,429	4	24,117	5	22,920	3.8
マレーシア	12,155	3	44,111	8	65,119	11
ドイツ	8,253	2	13,874	2.7	15,676	2.7
イギリス	7,503	1.9	13,996	2.7	12,019	2
フランス	7,317	1.7	13,397	2.6	8,905	1.5
イタリア	3,495	0.9	6,189	1.2	5,876	1
オーストラリア	3,145	0.8	3,966	0.8	4,804	0.8
総数	405,209	100	522,059	100	596,942	100

出典：雲南省旅游局提供資料

さらに国・地域別の統計数値には現われないが，それら東南アジア諸国からの旅行団は大半が中国系住民を中心に構成されている。したがって，それらの旅行客増に対応するための衛生条件や飲食の嗜好を考慮した宿泊・飲食施設の改善やガイド等の増員，観光・娯楽内容の充実などの受け入れ体制の整備は，90年を境とする香港，マカオ，台湾からの旅行客の増加への対応の延長線上にあり，その意味では格別新しい軌道修正を要しないものであったと言える。加えて，それは90年代の中国経済の急成長にともなう国内旅行客の大幅な増大への対応に連結するものともなった。

大理白族自治州を訪れる旅客数においては，当然，国内からの数が海外からの数を常に上回ってきた。しかし，大理市が外国人に広く開放された80年代の半ば以降，観光による利益の獲得という点から州政府が特に重視してきたのは，主として海外からの観光客であったと言えよう。1990年から毎年刊行されている『大理州白族自治州年鑑』の観光に関する記述には，80年代前半からの毎年の海外旅客数が掲載されているが，国内客については全く言及されないことが多い。それは単に統計がとりにくいというよりも，海外からの旅客数の動向のようには注目されていないことがうかがえる。例外的に1989年について国内からの旅行客が100万人近く訪れ，500万元余りを現地に落としていったと記されているが（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1990: 208），統計的な確固たる根拠に基づく正確な数字とは思われない。

この状況に変化が見られるのは，92年についての記述からである。それによれば，同年の国内旅客数は前年の約2倍の62万人となり，収入の面では前年の80%以上の伸びを記

録した。さらに，同年の観光が目覚しい成績を上げた理由の一つとして，国内の観光市場を積極的に開拓したことが挙げられている。また，同年に州人民代表大会常務委員会を通過した「観光発展計画」によれば，1）第8次5ケ年計画末期までに年間140万人の国内外からの旅客数を達成し，国内からの旅行客については134万人から26,800万元，国外からの旅行客については6万人から300万ドルの収入を上げ，2）第9次5ケ年計画末期までに年間200万人の国内外からの旅客数を達成し，国内からの旅行客については186万人から37,200万元，国外からの旅行客については14万人から700万ドルの収入を上げることが目標に掲げられている。また定性的目標の中で，国内に対しては，観光，リゾート，娯楽などの多彩な活動が一体となった観光地を目指すとともに，海外についてはすでに述べたように，東南アジアからの旅行客を重視する方針が示されている（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1993: 156-157）。ここに明らかなように，中国国内の経済状況の変化につれて，大理州の観光政策において国内旅行客が大きな比重を占めるようになってきたのである。

以上のような大理州を訪れる観光客の量と質の両面での変動ならびに観光政策の推移とともに，大理白族自治州における観光は着実に発展を遂げてきた。その発展において，自治州の中枢である大理盆地は言うまでもなく中心的位置を占めてきた。省都の昆明から約400キロの道程にある同州を訪れる旅行客は，州内の他の県には立ち寄らないこともあるが，大理盆地は必ず訪れる。州内で観光客で最も賑わうのが大理盆地であり，観光客と現地住民との間の相互接触が最も多く，観光収入を増大させるためのさまざまな試みが最も活発に展開し，観光による社会変化が最も著しく起こったのも大理盆地である。そして，観光の発展にともなって大理盆地で生じた新しい展開には，そこの主要な住民であるペー族の生活や文化と深く関わり，またそれを変化させうる動きが認められるのである。

絞り藍染め産業の発展と「土」のカテゴリーに対する再認識

私が1984年の春以来，調査を続けている蒼村では，49年の新中国成立以前から絞り藍染めがおこなわれていたが，83年に村営の工場ができて以来，観光や輸出用の商品生産が発展し，それが村民の現金収入の増大に多く貢献してきた。

85年から86年にかけて私が蒼村に長期滞在をしている頃，絞り藍染め工場の売店は，普段は閑散としていた。しかし，外国人，特に日本人の小規模な団体旅行客がひとたびやって来ると，途端に賑やかになった。彼らは絞り藍染めの布を旅行土産として多く買い求めたからである。村に住んでいた珍しい日本人である私も，店の前を通るとよく足を留めて布を眺め，また時には気に入ったものを買うこともあったので，村人は，日本人はその布をどう使うのか，それで何をするのかと，不思議そうに尋ねたものである。私が

「服を仕立てる」と答えると，「こんな『土布』なんかで服を作ってもみっともない」というのが彼らの反応であった。「土布」の「土」とは，「その土地の」という意味であるが，この場合の村人たちの口調には明らかに「土臭い」とか「田舎じみた」というニュアンスが伴っていた。その当時，蒼村では老人以外は一般に化学繊維の布地で作られた服を好んで身につけていた。村人たちには，新たに発明され，大きな紡績工場で生産される化学繊維の布地が近代的で優れたものであり，昔ながらの木綿地を手作業で染めた絞り藍染めの布地は流行遅れだという意識が確かに見られた。

私は，86年3月に村での長期滞在を終了して帰国したが，その後，86年，87年，88年の夏に村を訪れた。この間，絞り藍染めの布の生産量は徐々に増大し，絞りの技法の種類や柄にも少しずつ変化が見られたが，最も驚いたのは，88年夏に訪れた際，村人の絞り藍染めの布に対する態度が一変していたことであった。その布がソファーのカバーとしてかけられている役場の応接室で，村の幹部は，村の絞り藍染め工場の成績が目覚ましいことを嬉しそうに語った。また，村の青年の中には，その布で作ったシャツを着ている者さえもいた。その青年に，なぜ以前には「みっともない」とさえ言っていた布で縫製した服を着ているのか，と尋ねると，彼は笑顔で，1）この綿の布は冬に暖かく，夏は涼しい，2）天然の植物染料を使っていて，消炎効果があり，皮膚によい，3）最近，経済状態がよくなってきたので，そういう服を買うゆとりができた，という3つの理由を挙げた。

この蒼村における変化は，大理盆地の中心にある旧大理県城の町に，絞り藍染めの布やそれを使った服やバッグなどを売る店が急増していったことに続いて起きた変化であると思われる。

大理の旧県城における外国人観光は，84年以来，一つの大きな特徴を持っていた。そこを訪れる外国人観光客は，短期団体ツアーも確かに少なくないのだが，一人あるいは数人の友人たちと個人的旅行で訪れ，かなり長期間滞在する，年齢的には比較的若い観光客が相対的に多かった。そこで，彼らのために安価で質素だが清潔で，お湯の出る共同のシャワー室があり，英語によるコミュニケーションも可能な宿泊施設が用意された。またレンタサイクル屋も英語に堪能な現地の若者が早々と開業していた。そのような時間に束縛されない自由な旅行を楽しむ外国人観光客は，団体ツアーの客とは異なり，ゆっくりと自分の趣味に合わせて周辺を見て回るので，レンタサイクル屋は繁盛した。

このようなガイド付きではない観光の中で，当然，さまざまな形で外国人観光客と土地の者との間の直接的なコミュニケーションが発生した。観光客の中には中国に留学していて中国語に堪能な者もおり，また，何かを見てまわるというよりも，時間に追われずに大理で暫しの時を過ごすことを楽しむ者も少なくないため，英語ができて，外国人との接触に積極的な現地の若者などとの間でかなり親密な交流が発展することもあった。

このような外国人観光客と現地の者との直接の交流を通じて，レンタサイクルのみならず，観光客の必要に対応したさまざまな商品やサービスが発展した。外国人観光客か

ら調理法を教わり，ピザ，ステーキ，スパゲティ，カツ丼や天ぷらを出すレストランや，外国人観光客の注文で絞り藍染めの布を用いて即座に服を仕立てる店が早くから登場した。

80年代半ば前後，蒼村の人々のみならず，大半の中国人は絞り藍染めの布の服を好むことはなかったが，外国人観光客の中には絞り藍染めの素朴な味わいや木綿の肌触りを好む者が多かった。中国風あるいは民族風の服に仕立てるのと同時に，中には自分の持っている服を店に持ち込み，それと同じ形の服を作るようにと注文する者もあった。それによって外国人の好む形と柄の服が絞り藍染めの布で作られることになり，大理旧県城内にはそういった服を専門に仕立てて販売する店が増えていった。また服ばかりではなく，その布地を用いた袋物なども作られた。このような変化を通じて絞り藍染めの布柄のデザインは豊富になり，洋服の布地として映えるものが多く作られるようになった。

さらに蒼村では，雲南の省都，昆明にある，中国では「進出口公司」と呼ばれる輸出入を扱う会社，数社を通じて日本の会社との取り引きが徐々に増大し，日本から送られてくる注文やデザインに基づいてテーブルクロスなどの柄は大きく変わり，浮世絵柄の絞り藍染めや和風の暖簾なども作られるようになった。蒼村の絞り藍染め工場のデザイン担当者もその刺激を受けて，積極的に新しい絞りの技法や新しいデザインの開発に取り組むようになった。外国の消費者や現地を訪れる観光客の好みに合った商品開発は，当然のことながら絞り藍染めの布の販売を促進した。

以上のような背景の下に，蒼村の絞り藍染め産業は飛躍的成長を遂げていった。97年頃までは日本への輸出が年々増大していったし，絞り藍染め関連のみやげ物は観光客の目を引く魅力的な商品として，町のみやげ物などを扱う多くの店の店頭を飾った。絞り藍染めは大理の代表的な観光商品となったばかりでなく，雲南みやげの一つとして，省都の昆明をはじめとする雲南各地の観光地でも売られるようになった。

また，蒼村の絞り藍染め産業の発展は単に布の生産と販売を通しての利益のみならず，村民に副次的な経済効果ももたらした。大理盆地の観光スポットの一つである「蝴蝶泉」に近接する蒼村では，村の北側の街道沿いに蝴蝶泉に至るまでの土地を商業地区として開発することを計画し，市政府などの関係政府機関の承認を得て92年頃から街道を拡幅すると同時に道の両側に店舗の建設を進めた。開発予定地には耕地は少なく，荒地として未使用であったり，墓地として使われていたので，開発には好都合でもあった[2)]。開発部分の街道は，中央に植物を植えた安全地帯を配置し，幅を広くとって美しく舗装された歩道も設けられ，それまでの農村には見られなかった装飾的で近代的な街灯も備えられた。95年にはこの街道の中央部分に村営のホテルも開業した（横山 2001）。その後，街道の両側には白壁に装飾部分の映える「白族伝統の家屋」様式のレストランやみやげ物店が開店していき，絞り藍染めはそれらの店舗を彩り，また観光客の関心を引く主要商品となったのである。

蒼村の「観光商業街」とも言えるこの地区の開発の第一の要因は，蝴蝶泉に近く，また後述する洱海の日帰り遊覧観光の発展とあいまったその位置的利点にあると思われる。しかし，絞り藍染めという強力な観光商品の存在が，地区の開発計画の実現やその後の発展を後押ししたことは疑いない。大判のベッドカバーなどの絞り藍染め布が何枚も並ぶ風情は，観光地としての雰囲気を作り出す重要な要素となっている。

このような経済発展と密接に絡み合った絞り藍染め業の発展を通じて，村人の絞り藍染めの布そのものに対する態度は徐々に変化していったように思われる。私は以前，「『土』のカテゴリー」という枠組を設定することにより，文化国家であった伝統的中国における少数民族の位置づけを理解し，白族の信仰の対象である守護神に対する総称の変化の過程を説明づけることができると述べた（Yokoyama 1992）。また，絞り藍染めや観光開発における村人の「土」のカテゴリーに対する態度の変化については，別の論文でも取り挙げ，さらに広い視野において「土」のカテゴリーの分析をおこなった（横山 1997）。したがって，「土」のカテゴリー自体については，ここでは詳しく論じない。しかし，本文で述べてきた観光の発展を通して生じた現象を一口で言えば，いわば中国の大伝統の側の「文」のカテゴリーに対しても，また西欧あるは外国の側の「洋」のカテゴリーに対しても，以前は劣勢に置かれてきた「土」のカテゴリーに対する見方が，蒼村では近年，変化を見せているのである。

さらに，絞り藍染め産業とその周辺で起こった変化の中で注目されることは，絞り藍染め産業の発展自体，外国人観光客や輸出相手国の業者との双方向的コミュニケーションを伴う接触，つまり，国外の異文化との交流を通じてもたらされたことである。そして産業の発展が白族自身の自らの伝統技術・文化の見直しにつながった。換言すると，以前は直接的に交流することのなかった外部者が，白族に，彼らから見て「土」のカテゴリーに属する事物に対する再認識を促したのである。

絞り藍染めのブームは漢族の間にも広がり，中国国内でも一時は観光商品の枠をこえて日常着の服地としてその販路を拡大した感があった。現在，すでに日常着としてのブームは去ったが，蒼村の白族の間では，日常的にも従来以上にこの布地が使われている。以前は絞り藍染めと言えば，女性の頭飾りに使われるくらいであったが，それが服の布地として，あるいは乳幼児を背負ったり，抱いたりする際の覆い布として，ソファーや棚のカバーとして好まれ，使われている。そして，絞り藍染めは，蒼村の人々の自民族や自分たち自身に対する誇りやアイデンティティの根幹の一部を支えているように思われる。今や彼らは嬉々として，自分たちの祖先が昔から藍染めの原料である「板藍根」を栽培し，糸絞りは蒼村の女性たちが伝えてきた伝統的手工芸であると語るのである。

三道茶の「創造」から規範化へ

94, 95 年頃から急激に，「三道茶」という名称が大理盆地や白族に関連して頻繁に語られるようになった。三道茶とは，3 種類の「お茶」による客人に対するもてなしで，それを形容して，8 世紀に大理盆地に建国した南詔国と結びつけて「南詔以来の伝統の」というような宣伝文句が三道茶を提供する大理の旧県城内の飲食店の看板に見られる。また，94 年 8 月 8 日に大理白族自治州の歌舞団が「白族三道茶」という公演をおこなった際に配布されたパンフレットにも「『三道茶』は白族の古来からの茶の品定めの芸術で，8 世紀の南詔時代に起源し，今日まで伝承されて，すでに千年余りの歴史を有する」と書かれている。しかしながら，「三道茶」という言葉が使われるようになったのは 1980 年代になってからのことである。

大理の文化や歴史などを紹介する『大理風情録』（1981 年刊）に，「三道茶」の名称が初めて登場した。この書籍は当時の大理州文化局の主要メンバー，つまり文化局長の尹明挙以下，施立卓，張楠，張世慶の4名が分担して執筆したものである。『大理風情録』は最初の「大理一瞥」で，大理の地理的概況と「大理」という名の歴史的由来を説明した後，大理を自然，歴史，風俗，人，特産の各項目に分けて紹介している。その内容からして，この本は観光客向けに書かれたものである。また，その表紙に「大理風情録」とともに“Scenery of Ta Li”と「大理の風情」という英語と日本語の表題が書かれているのを見ても，特に外国人観光客を意識しているということがわかる。

私は4 人の執筆者のうちの一人から，この書籍は，大理の観光開発計画の中で州文化局に編集・執筆が依頼され，何か観光の目玉になるようなものはないかと考えて，語呂のよい「三道茶」という名前を思いついた，という話を聞いたことがある。つまり「三道茶」は，大理で文化行政の仕事に携わる関係者が造語したものなのである。

『大理風情録』の中で「三道茶」は，風俗を取り上げた「風俗奇趣」の章に「白族烤茶与下関沱茶[3]（ペー族の焙じ茶と下関の『沱茶』）」という表題を掲げた文章の中に登場する。この時に造語されたものだけに，表題を飾るような扱いはされていない。ここでは，独特の入れ方があり，またペー族の民間の慣習として伝えられてきた「烤茶（焙じ茶）」について，道具や茶を入れるプロセスを丁寧に紹介している。さらに，焙じ茶の1 杯目を飲み終わると，容器に再びお湯を注いで茶を出し，このお茶を浸出させる1 回ごとのプロセスを「道」という量詞で数えることが述べられ，次のように「三道茶」は登場する。

「ペー族の焙じ茶は一般に三杯もてなし，『三道茶』と俗称される。つまり『頭苦，二甜，三回味（最初は苦く，次に甘く，3 杯目は後味が残る）』である。地方によっては，2 杯目の茶の中にクルミのスライスや黒砂糖を入れ，また，山地ではそれにさらにもう 1 杯，蜂蜜に数粒の山椒を加えた蜂蜜山椒茶を加えることもある」（尹・施・張・張 1981：

98-101)。

私が蒼村でフィールドワークを始めた84年以降，蒼村の人々の生活の中で直接，目のあたりにし，また以前の状況として聞き及ぶことのできた範囲では，村人の間で伝承されてきたと言えるのは，「土罐」と呼ばれる独特の小型の素朴な陶製容器を直接火にかざして焙じる「烤茶（焙じ茶）」や，黒砂糖（中国語では「紅糖」）をベースにし，そこに場合によって色とりどりの米のあられや牛乳の蛋白質を薄い膜状に凝固させてつくる大理名産の「乳扇（牛乳に酸を入れ，蛋白質の薄皮を張らせ，干してせんべい状に乾かしたもので，扇のような形状からその名が付いたと思われる）」やクルミなどを入れた甘い飲み物を「茶」として人に供する慣習であったと思われる。焙じ茶は小さな容器で十分に焙じられた後，別の薬缶で沸かしておいた湯がその容器に直接注ぎ込まれる。すると，一瞬にして泡とともに茶の葉が吹き上がり，苦みの中にまろやかな茶の甘さや清新な味が感じられる濃厚な茶が出来上がる。それと黒砂糖で甘みが付けられた飲み物とは対照的で，両者は心地よいバランスを見せる。この2種類の茶が見られる状況は蒼村に限らず，大理盆地のペー族の農村でほぼ共通している。

大理盆地と茶との結びつきを文献で溯ると，明代の『明一統志』（1461年刻本）「雲南布政司」中の「大理府」の記載に，その「土産」として，大理盆地にある感通寺でとれる茶は他で産出されるものより味がよいと記されている（方 2001: 182)。また，大理盆地出身の文人，李元陽がまとめた嘉靖『大理府志』（1563年刻本）の巻之二地理志「物産」で，「飲饌」に属するものの一つとして茶が取り上げられ，蒼山の茶の樹高は2丈（1丈は約3.3m）もあり，その味は何年も貯蔵するほど益々好くなるということが記されている。さらに万暦年間（1573～1619）に刻本されたといわれる『滇略』の巻三「産略」には，雲南の著名な茶の産地として昆明の太華寺の茶，普洱の茶と並んで感通寺の茶が登場し，それは太華寺の茶よりも上だが，値段も安くないとある（方 2000: 691)。

著名な旅行家であり『徐霞客遊記』を遺した徐霞客は，明代末期に大理を旅し，1639年旧暦3月の感通寺での逗留を記録している。その中に寺の庭に茶の木が植えられており，高さは皆，3，4丈もあって，きわめてモクセイの木に似ており，葉を摘む際には梯子を掛けねばならないこと，また茶の味が頗る美味であることが書かれている（徐 1982: 928)。

今のような形式の三道茶が広く普及するようになったのは，建築と設計を学んだ後，大理市の観光計画作成に関与し，市内の公園建設などの仕事に携わった，個人的才能に恵まれた漢族のL氏が，白族の慣習を基礎として，三道茶の商品化に成功したことを発端としていると言ってよい。地域の観光開発行政に精通していた彼は，芸術や文化的なものへの関心が高い上に商才にもたけ，洱海遊覧を含む大理の1日観光コースを考え，1987年の春節から海運会社から遊覧船を借りて営業を始めた。遊覧船上で観光客向けに『大理風情録』を販売したところ，それを船上で読んだ観光客から「三道茶」はどこへ

言ったら味わえるのか，という質問を何度か受けた。その当時，実際のところ，本に書いてある通りの，3 種類のお茶によるもてなしという形の「三道茶」は，大理盆地のどこへ言っても口にすることはできなかったのである。

1 日観光コースの成功で資金をためたL氏は，88 年になると，公園局の仕事をつづけながら，「三道茶」をゆっくり味わえる場所を自ら設けて経営することになった。全く閉鎖されていて誰も上ることができず，使用されていなかった大理旧県城の南の城門の上のスペースを文物管理所から賃貸し，城門の上からの眺望を楽しみながら「三道茶」を賞味できる店を同年 10 月 1 日から開いた。この時，彼とその仲間たちは白族の人々が日常生活の中で飲むことのある焙じ茶（中国語ではその味から「苦茶」とも，また熱した容器に湯を注ぐ際，ブクブクと音を立てて泡が吹き上がるところから「雷響茶」とも呼ばれる）と甘い茶（「甜茶」）の 2 種類に，さらに生姜をベースにしてハチミツを入れた「姜茶」を加えた。気候の寒い時などに白族は「姜茶」を作って飲むことがあったし，場合によっては甘い茶の中に生姜が入ることもあったが，1）焙じ茶，2）黒砂糖，クルミ，あられ，「乳扇」を入れた甘い茶，3）ハチミツを加え，生姜の香りの強い茶の 3 種類をセットにして飲むことは，その時点ではペー族の慣習としてはどこにも存在していなかった。

「宮廷茶」という呼び名をつけた広告も出して宣伝をしたところ，眺望のよい城門の上という場所もよく，また代金は 3 種類のお茶のセットで 5 角（1 角は 1 元の 10 分の 1 で，1 元は当時，約 17 円），さらに城門へ上がる入場料は三道茶の飲食にかかわらず当初は 1 角，後に 2 角，さらに値上げしても 5 角と，手頃な値段に押さえたため，この企画は国内外の観光客に大変好評で，素晴らしい営業成績を上げた。L氏が記憶するところでは，旧暦の 3 月に開かれる大理の伝統的物資交流会である「三月街」期間中は，1 日で 2,000 元以上のあら利益を上げたことがあったという。

この後，89 年頃から下関賓館で経営陣に加わっていたある人物が，さらにお茶を飲みながら民族舞踊の公演を見るという形式の「三道茶文芸晩会」を考え出し，これも観光客を喜ばせた。ここでの三道茶の 3 種類の「お茶」自体はL氏らのものと大差はなかったが，最後の生姜の茶の中に山椒が加えられ，より刺激的で複雑な味となった。さらにそれぞれの飲み物に，大理特産の「密餞」と呼ばれる砂糖漬けの果物などが添えられるようになった。また，白族の民族衣装をつけた若い女性が茶と茶菓子とを客の前に運び，両手で器を支え，膝を少し曲げながら恭しく器を少し上方に持ち上げてから給仕する仕草が付け加えられた。

この民族舞踊の公演と一体となった形式の三道茶は，その後，他のホテルや飲食施設でも若干の改変が加えられておこなわれるようになった。また大理を訪問する賓客をもてなす際の州歌舞団のレパートリーにも加えられた。さらに，92 年に昆明市の滇池湖畔につくられた雲南民族村内にある白族村でも，白族文化を提示する「目玉商品」として位置づけられるようになった。

この民族舞踊の公演を伴う三道茶は，90年代以降の観光客の構成の変化とも合致しながら大きく発展していったように思われる。つまり，上述したように，90年代に入って，国外ではシンガポールやタイの中国系を中心とする人々が増え，そして徐々にそれよりも圧倒的な国内客の増加が見られるのである。大理市のある旅行社の経営者の分析によれば，それら観光客は，少数民族の生活の様子などに強い興味を抱く欧米や日本からの観光客とは，明らかに異なる志向性を持っているという。その言によると，ともかく彼らは賑やかなのが好きで，したがって遊覧船上でのカラオケは重要であるし，民族舞踊も喜んで観賞する。しかし，歴史的な観光スポットや少数民族の暮しぶりには，比較的低い関心を示すという。

また，三道茶の発展は，中国大陸における全国的な「茶芸」や「茶館」の発展と同調して展開してきたものだとも言える（韓 1996: 91-94）。

上述した「三道茶」の，いわば「創造」と発展拡大のプロセスの中で，地元の文化人あるいは研究者の間では，三道茶の「規範化」も論議されるようになった。それは90年から91年にかけて特に盛んであったという。最初は苦く，次に甘く，最後は後味の残る茶を出すという順序や，茶に用いる材料などについて規範を作成し，それをビデオに記録し，大理のテレビ局が90年に放映した。また，大理白族自治州の文化局，博物館，白族文化の研究者組織，茶の生産・販売会社などの関係者が集まり，大理の茶の文化の各方面について話し合うシンポジウムも90年末に開かれたという。

政府諸機関の「官」に属する人々，利潤を追求するビジネスをする業界の「経」に属する人々，研究者ら「学」に属する人々が寄り集まって文化的事象について規範化を議論したり，あるいはコンテストを開催してより「伝統的」あるいは「優れた」ものを選びとろうとする現象は，現代的な文化の政治と経済とにかかわる営為としてきわめて特徴的であり，大理州や中国に限ったことではない。大理州について言えば，三道茶の商業的隆盛とともに茶の材料や入れ方，それに付随する娯楽活動にさまざまなヴァリエーションが出現し，これをペー族の「伝統文化」として確立し，継承させ，さらには観光に積極的に活用していくには，その規範を示し，ある程度の統一化や標準化をはかる必要があるという判断を文化行政に携わる側が下したということであろう。

大理州では地域の工業の発展において資金投入や市場の出入り，環境汚染の問題にぶつかり，「煙の出ない工業」である観光業を基幹産業として発展させる方向が求められた。その中で風景などと同様に民族文化が観光資源として重要であるという認識が高まってきた。そして空間的にも分散していて，時間が推移する中で変動を免れないという民族文化の資源としての特徴から，それを意識的に選択し，保護し，管理せねばならないという観光政策が推し進められてきたのである（鄭 1997: 52）。

他方，白族農民自身も観光商品としての三道茶を積極的に押し出し始めている。つまり彼らも「経」の世界において，三道茶を利用して経済的利益を得ている。しかし，現在

までのところ，それはあくまで商品としての三道茶であり，彼ら自身の生活の中にまでは「創造された」三道茶が浸透しているとは言えない。冠婚葬祭の場で人々に供される「茶」は，相変わらず基本的には苦い焙じ茶と甘い茶の 2 種類のセットである。経済状況がよくなった今では，以前と比べて，甘い茶に乳扇やクルミなど少し値の張る材料が多く入るようになったり，あるいは蜂蜜や生姜などかつてはほとんど入れるのを見なかった素材を入れることもあるようになったくらいのものである。膝を折り曲げながら茶碗を少し上に持ち上げる「宮廷式」といわれる動作が入ってくる気配は見えないし，「3 種類」を揃えて出そうとすることもない。ペー族の日常の生活文化のレベルには「三道茶」はフィードバックしていないと言ってよいだろう[4)]。

洱海遊覧と環境保護

前節で現在のような三道茶関連の観光の発端を作った L 氏について紹介し，彼が洱海遊覧を含む 1 日観光コースを始めたことに言及した。L 氏は当時，日本でいえば公園局に当たる大理市の「園林局」に務め，公園建設の仕事で蒼村の北にある蝴蝶泉によく通っていた。蝴蝶泉は洱海とほぼ並行するようにその西側を南北に走る街道の，そのまた西側の，蒼山に向ってゆるやかな斜面が延びている当たりに位置している。蝴蝶泉から東にまっすぐ向かい，街道を超えてさらに進んでいけばやがて洱海にぶつかる。ちょうどその当たりは埠頭になっていて，漁船が時折停泊した。87 年春節に彼が遊覧船の営業を始めるまで，洱海には定期運航する遊覧船はなかった。また，当時の大理は公共交通機関として街道を往来する車両の台数はまだ少なく，バス会社が運航するバスは，市場に売買に出かけたり，町に用事で出かける地元の人々の便宜のために，朝夕に集中していた。そこで，ちょうどバスのない午後の時間に蝴蝶泉の観光を終えた客は帰りの足がなかなか見つからず，不便をしているのを L 氏は知っていた。

そこに転機が訪れた。86 年に州や市の政府が特別に接待する客のために洱海の海運会社は遊覧客船を建造し，大理地域の名花である椿の名を付けて「茶花号」とした。この遊覧船は接待に 2, 3 度使用されたが，その後は必要がなく，暫く眠っていた。L 氏はそれに目をつけ，遊覧船を借り受けて営業をする 1 年契約を結んだ。そして 10 人余りの仲間とともに「洱海一日游」と名づけた観光を始めたのである。公園局に籍は置いたままではあったが，個人がこのように「請負い」の形で起業することは当時，珍しくなかった。雲南省の東部の町の出身である L 氏は毎年の春節には帰省するのが常であったが，その年は実家にも帰らず，前日に乗客が船上で食べるためのパンや携帯できて冷めても食べられる食物をたくさん買い込んで，下関のホテルに宿泊する客に盛んに宣伝をおこなった。当時，大理市内で海外からの団体旅行客などが宿泊するホテルというのは，下関市内の 2, 3 ヶ所に限られていた。懸命の宣伝活動にもかかわらず，開業日は香港からの観光

客4名だけがお客となったが，10人余りの仕事仲間全てが乗船し，船上で歌を歌い，賑やかな船出となった。

L 氏らは毎晩，下関のホテルを回り，客室にまで足を運び，観光内容を説明し，お客の獲得に努めた。特に最初の半年は乗客は香港，シンガポール，日本などの海外からの観光客が主で，国内客は少なかった。昼食と各観光スポットの入場料込みで当初は 8 元の料金で始めた1日観光は，数日後には営業困難となり，すぐに 10 元に値上げされた。その後，営業成績は少しずつ好転はしたが，L 氏にとっては朝から夜まで負担も大きく，1 年の契約期間がきれるとまた公園局に戻った。そして今度は上述の「三道茶」の商売を手がけることになるのである。しかし遊覧船を使った1日観光は，その後，L 氏を引き継いで海運会社が 15 元の料金で営業するようになった。

遊覧船は基本的に洱海の南端にある州政府のある町，下関を午前中に出発し，いくつかの観光スポットに立ち寄って蝴蝶泉まで行き，午後にまた別の観光スポットに寄って下関まで戻れるように運航された。L 氏は遊覧船とともに下関と蝴蝶泉との間を往復する観光バスも用意し，蝴蝶泉を中継点として船とバスとを乗り換えられるようにもしたが，多くの客は往復とも船で回るのを好んだという。次第に観光コースは，下関からそのはずれにある洱海公園に寄り，その後，湖に浮かぶ金梭島，小普陀などの島をめぐり，蝴蝶泉下の桃源村の埠頭まで行き，蝴蝶泉で一時を過ごした後，午後は白族の伝統建築の精華が集中する喜洲，南詔時代に創建され「三塔」で有名な崇聖寺，大理旧県城を回って下関に戻るというように固定されていった。

また，パンや味付けをした鶏肉などの携帯に便利な，中国語でいわゆる「乾糧」と呼ばれる食品から成る「弁当式」の昼食は，温かい物を食べるのを常とする香港やシンガポールなどからの中国系のお客には不評で，L 氏はやがて桃源村の埠頭付近の農家に昼食を提供させるように改善し，これは海運会社にも引き継がれ，次第に桃源の農家はレストランを専業とするようになっていった。

200 人ほどを乗船させられる「茶花号」1 艘だけの運航で始められた洱海の遊覧は，海外からの旅行客が大幅に増加し，鄧小平の「南巡講話」が年頭に発表されて中国経済が高度成長へと転じる 1992 年になって，260 万元が投資されて 4 艘に急増し，一度に 4 倍の乗客を収容できるようになった（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1993: 158）。その後，いろいろな変化や紆余曲折を経ながらも湖の遊覧を含む 1 日観光は発展し，観光客の数は増加していった。また，1 日観光の代金は，観光スポットの入場料の値上がりにつれて徐々に値上がりし，96 年末の時点で 90 元となっている。

ところが，このような洱海遊覧観光の発展は，湖の環境汚染を甚大に悪化させ，州政府を中心に環境対策を強力に推進する必要が生じた。そして，それが洱海で漁業を営んできた地元のペー族の経済活動を変化させる事態となった。

洱海には豊かな漁業資源があり，湖畔には魚をとって生計をたてるペー族の人々が古

くから居住している。私が 1984 年に現地調査を開始した頃，湖ではエンジン付きの漁船で漁網を使用する漁業が盛んに行われていた。また，大理州では従来から湖での養魚がおこなわれており，1978 年当時で州内の養魚面積は 54,260 ムー（1 ムーは 6.67 アールに相当）に及んでいる。経済改革以後，さらに人工の養魚用の池を掘っておこなう養魚が発展し，89 年現在で州内に 5,350 ムーの人工養魚池が見られた。さらに網箱を使った養魚は，1984 年に洱海において試行が始まって以来，技術的改良を経ながら次第に拡大発展を遂げてきた。89 年に州内の網箱による養魚面積は 100 ムーを上回り，その 1 ムー平均の年間養魚生産量は400 kgに達している（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1990：172）。湖での遊覧観光が発展し，湖畔などで食事をする乗客が増えるにつれ，養魚がますます盛んになったことは言うまでもない。

他方，湖の水の汚染対策は，1989 年に『洱海管理条例』が施行された当時はまだそれほど大きな注目はされてはいなかったと言ってもよく（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1990: 217），その後，1992 年に国連の地域開発センターチームによる洱海の環境保護と水資源開発に関する調査が実施される前後から，州政府は水質汚染対策に本腰を入れ始めた（大理白族自治州地方志編纂委員会編 1993: 164-165）。これはちょうど，洱海観光の発展と軌を一にしている。したがって，汚染対策を進める一方で，観光客が増加し，遊覧船から湖への汚水や食物などの廃棄量は増大していき，水質は悪化の一途をたどっていった。そして，ついに 1996 年から湖での網箱を使用した養魚とエンジン付き船による漁業を禁止する対策をとらざるをえない事態となった。また，遊覧船に対しては，1997 年から船上での昼食を禁止し，湖畔の村で食事をすることとし，また船からの汚染物質の投棄は極力控え，水質汚染の悪化を食い止めるようにという指導もとられている。

エンジン付き漁船での操業や網箱による養魚を禁止された漁民に対しては一定の補償はおこなわれたが，それで漁民の生活への影響が全くなくなったわけではない。この措置は古くからの彼らの生活そのものを大きく変えていく結果となった。

おわりに—文化変化と経済発展

ここまで述べてきた大理盆地での状況を通して，文化変化と経済発展に関して，以下の指摘をしたい。

1）絞り藍染め産業と三道茶の二つの例には，共通して，民族文化が観光を通じて商品化され，経済的な利潤をもたらすという側面が見られる。しかしながら，商品化に着手した主体と文化に対する商品化のフィードバックにおいて明確な違いが見られる。外からの刺激や情報に対する反応として始まったにせよ，ペー族の農民自らが主体であった絞り藍染めの商品化は，その成功によって，ペー族自身の生活の中ので絞り藍染め製品の使

用が拡大し，彼らの自尊心をより強固なものにした。他方，三道茶の場合，今のところ，フィードバックが見られないのは，商品化されてからの時間がまだ短いからとも考えられる。しかし，最近のお茶工場での「三道茶パック」の生産にいたるまで，その主体は，ほぼ漢族，あるいはペー族の民族文化の基盤である農村社会の外で暮らす人々であり，当然，利潤の多くもそちらに入っていき，ペー族の懐に入っていくのは少ない。そのことが，果たして三道茶の生活文化への浸透と直接かかわりを持つかどうかは，慎重に検討しなければならないが，商品化された民族文化と当事者との関係が，彼ら自身の文化との関わりに何らかの影響を持つ可能性は指摘できる。

2）絞り藍染め産業の発展のきっかけとなったのは，日本および欧米からの海外観光客の到来であり，ペー族が従来から頻繁に接触してきた人々とは異なる審美観や価値観を持った人々との双方向的コミュニケーションである。これは，今日のような大量の，長距離の人の移動をもたらす観光によって初めて生じた現象である。また，製品の海外輸出が本格化してからは，昆明の貿易会社を媒介とした商取引という形で，間接的ながら効果的な双方向的コミュニケーションが成立している。注目すべきは，従来の政治的・文化的力関係に起因すると思われる価値体系が，その価値体系の外側の人々との交流を通して，変質あるいは多様化したことである。それにより，経済活動に対する積極性が生まれた。また，いかなる経済状況も，従来の経済圏内での経済活動の結果であると言え，圏外との接触がそれを転換させるような経済発展につながる可能性がある。

3）観光化により「伝統的文化」が損なわれるという見方は，バリ観光などの例からも単純すぎることは明らかである（鏡味 2000）。ペー族においては，観光のために商品化される文化と自身の生活に根差す文化との相互交流はあるものの，両者は区別されている。また，改革開放以後，観光化の進展とほぼ歩調を合わせるようにペー族社会で展開してきた文化変化は，たとえば女性の民族衣装の非日常化のように，最終的には彼ら自身の選択に基づいている。したがって，たとえば大躍進期以後，政治によって長らく停止した一部の宗教儀礼活動のように，政治の変化によって容易に元に戻るとは思えない。また，民族衣装を日常的には着なくなっても，晴れ着としての限定的着用は継続し，それに対する愛着や誇りは失われていない。

4）大理盆地の観光資源としては，民族文化もさることながら，自然環境が大きな位置を占めている。この地域のシンボルでもある洱海という湖は，その汚染が観光によって悪化したとも言えるが，また，まさに観光重視の政策のために，汚染対策が大きく前進したという面もある。観光業の発展と自然保護という互いに矛盾する側面を持つ両者をともに実現するため，政府が実施した措置は，湖での漁業に深刻な打撃を与えるもので，

白族漁民の生活を大きく変化させるであろう。矛盾の中に解決の道を探る難しい問題ではあるが，今回の決定が唯一の道なのか，湖で生活する白族自身の声はどのように反映されたのか，検討に値する。

注

1) 本文において使用したデータは，特に参考文献を明示していないものは，すべて筆者が現地でおこなったフィールドワークにより，直接，見聞したデータである。
2) そこにあったいくつかの宗族の墓地は他の場所に移設された。
3) 碗の形に圧縮した固形茶で，陸羽の『茶経』中の4分類に従えば，「団茶」の一種といえる。
4) 地元のペー族住民の生活文化にはフィードバックされていないという考察は1997年のシンポジウムにおいて報告したものだが，それ以後，2003年10月の時点まで，蒼村では三道茶が住民自身の生活に取り入れられた気配は見られない。

参考文献

中国研究所編

1999　『中国年鑑1998年版』大修館書店。

大理白族自治州地方志編纂委員会編

1990　『大理白族自治州年鑑1990』雲南民族出版社。

1991　『大理白族自治州年鑑1991』雲南民族出版社。

1992　『大理白族自治州年鑑1992』雲南民族出版社。

1993　『大理白族自治州年鑑1994』雲南民族出版社。

1994　『大理白族自治州年鑑1994』雲南民族出版社。

1995　『大理白族自治州年鑑1995』雲南民族出版社。

1996　『大理白族自治州年鑑1996』雲南民族出版社。

1997　『大理白族自治州年鑑1997』雲南民族出版社。

1998　『大理白族自治州年鑑1998』雲南民族出版社。

方國瑜編（徐文徳・木芹・鄭志惠纂録校訂）

2000　『雲南史料叢刊第六巻』雲南大学出版社。

2001　『雲南史料叢刊第七巻』雲南大学出版社。

国家統計局編

1987　『中国統計年鑑1987』中国統計出版社。

1989　『中国統計年鑑1989』中国統計出版社。

1994　『中国統計年鑑1994』中国統計出版社。

1998　『中国統計年鑑1998』中国統計出版社。

鏡味治也

2000　『政策文化の人類学――せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民』世界思想社。

韓敏

1996　「中国の観光開発における伝統的文化と毛沢東の観光化」『旅の文化研究報告』No. 4。

『新編雲南省情』編委会編

1996　『新編雲南省情』雲南人民出版社。

徐弘祖（褚紹唐・呉応壽整理）
1982 『徐霞客遊記』上海古籍出版社。
尹明拳・施立卓・張楠・張世慶
1981 『大理風情録』雲南人民出版社。
Yokoyama, Hiroko
1992 Separation from the tu Category: A Study of Generic Names of Bai Guardian Gods, In Nakane, Chie and Chien Chiao (eds.), *Home Bound: Studies in East Asian Society*. The Centre for East Asian Cultural Studies.
横山廣子
1997 「雲南ペー族の村からみた中国社会の変動過程」末成道男編『周辺から見た東アジアの変動過程』風響社。
2001 「国家政策の変遷とペー族農村社会」横山廣子編『中国における諸民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告 20）国立民族学博物館。
雲南省統計局編
1996 『雲南統計年鑑 1996』中国統計出版社。
1998 『雲南統計年鑑 1996』中国統計出版社。
鄭凡
1997 「旅游業中地方民族文化資源的保護与開発」『雲南社会科学』1997(2)。
中共雲南省委政策研究室編
1986 『雲南省情』雲南人民出版社。